

Title	ラッサアルとファイヒテ
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1928
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.22, No.3 (1928. 3) ,p.377(85)- 384(92)
JaLC DOI	10.14991/001.19280301-0085
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19280301-0085">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19280301-0085</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ラッサアルとフイヒテ

小泉 信三

ラッサアルが忠實なるヘゲル學徒を以て終始したことは、誰にも知られてゐる通りである。年十六にして始めて *Phänomenologie des Geistes* を讀んだ時以來最後迄、彼れは終にヘゲルを離れなかつたのである。既にヘゲリアネルたるラッサアルに、後れて或影響を與へたのがフイヒテである。而して彼れはフイヒテに對しても深く尊敬の意を表して、之を「有ゆる民族有ゆる時代の最も偉大なる思想家の一人」と稱し、フイヒテを主題とする二篇の文を公にして居る。

*Fichtes politisches Vernachtnis und die neueste Gegenwart.* 1860 及び

*Die Philosophie Fichtes und die Bedeutung des deutschen Volksgeistes.* 1826.

がそれである。(Lassalles *Gesammelte Reden und Schriften*. Herausgegeben von E. Bernstein 1919 Bd. vi) 前者は *Demokratische Studien* 編輯者の *Walesrode* に與へた書簡の形式を以て書かれて居り、後者は一八六三年五月十九日フイヒテ誕生百年記念日に柏林哲學會(*Die Philosophische Gesellschaft*) 及び科學協會(*Das wissenschaftliche Volksverein*) の會合に於て試みた講演である。前者の標題に所謂「フイヒテの遺言」はフイヒテが一八一三年に書き、今日でもあまり知られて居らぬ。政

治論の斷片であつて、此篇の大部分はフイヒテの文言の引用を以て成つて居る。これは或意味に於てラッサアルの「伊太利戦争と普魯西の任務」の續篇とも見るべきもので、彼れは其處でフイヒテに據つて獨逸民族問題を論じて居る。而してその獨逸民族の使命に就いて謂ふ所は、畢竟後者の所論と同一に歸着するものである。

後者に於てはラッサアルは簡單ながらフイヒテの哲學全體及び其哲學史上の位置を説き、此講演の準備をすることに依てフイヒテがカントから出で、ヘゲルがフイヒテから出たことを明確にするを得たと言つて居る(五月十六日附 Prof. Michelet 宛書簡)。

ラッサアルは先づ講演の始めに、人を偉大の人たらしむるものは何であるかと問ふて居る。答へて曰く、「其人が其の屬する所の國民の精神を其自身に於て、宛も焦點の如く、總括し、此の總括に依て之を最も純粹なる表現と發展とに持ち來たすこと」である。従つて偉人を祝祭するは常に國民自ら其國民精神を祝祭するに外ならぬと。

さてフイヒテの哲學上に成し遂げたことは何であつたか。顧みれば、十八世紀中葉の哲學は經驗主義 (Empirismus) であつた。經驗主義に由れば、所謂現實なるもの、客觀的なるものが意識外にあつて、それが意識と相對立し、意識其者は一個の *tabula rasa* に過ぎずして、此の *tabula rasa* の上に現實が其性質を書き入れる。受動的なる此の刻印又は印象の受容が、即ち真理だといふのである。それに對して獨逸精神が反對して起つたものが批評主義である。「認識に先だつて先づ認識能力其者が吟味せられねばならぬ。これが批評哲學の其から出發する所の命題である。而して批評哲學は、此吟味を行ふことに由て、客觀的在在の一切範疇、量、質、關係、原因、結果、可能性、現實、必然性其他、否な空間及び時間の感性的直觀其者と雖も、決して客觀的なる、經驗的なる或物で、獨立して自意識に相對するものではなくて、自意識の先驗的諸概念其者に外ならぬこと、主觀的思惟の本來の形態、判斷する悟性の本來の作用に外ならぬことを證明する」。此立場に由れば眞に客觀的なるもの、即ち物自體は認識の彼岸に在るものである。

此大業を成し遂げ、新しき哲學全部の基礎となつた「獨逸精神をカントと稱する」

併し乍ら、是に由て吾人は眞に客觀的なるもの、即ち物自體に到達することが出來ぬこととなつた。それを擱まうとして意識が愈々憧憬れて其手を差し伸ばせば、「客觀的なるものは愈々近づき難く彼岸に退く」のである。「神其者、絶對的なるものは、此立場に於ては一個の實踐理性の要請に外ならぬ、即ち一個の存在ではないのである」

そこで憧憬、神を離れた世界に對する嘆き、何物をも知り得ぬことを知る苦痛が起つた。精靈の合唱はファウストに呼んでいふ。

Weh! Weh!

Du hast sie zerstört,

Die schöne Welt,

Mit mächtiger Faust;

Sie stürzt, sie zerfällt!

Ein Halbgoth hat sie zerschlagen!

Wir tragen

Die Trümmer ins Nichts hinüber,

Und klagen

Über die verlorne Schöne.

Mächtiger

Der Erdensöhne,

Prächtiger

Bane sie wieder,

In deinem Busen baue sie auf!

そこにフイヒテが出た。「世界を再び建造し、而かも之を其胸に建造した獨逸精神をフイヒテと稱する」

フイヒテは純粹我若しくは自意識の概念から出發する。「AはAに等し」といふことは争ふ可からざる命題である。併し此命題の中にはAがあるといふことは與へられて居らぬ。與へられてゐるのは、若しAがあれば、それはAに等しいといふのである。併し此命題の中に既に無條件に確實なることがある。即ちそれはAの存在でなくて「我の存在」である。何となれば、若しAがあればそれはAに等しいといふ、自等の命題は「我に於て且つ我に由て定められる」からである。もし「我は

あり」といふことは、AはAなりといふ場合の如く、若しも我があるならば我は我に等しいといふのではなくて、内容的に無條件に我はあるといふのである。「其の在有がそれ自身を在るものとして定める所のもの、これが純粹我、純粹思惟である」。我のあることは、又我と區別せらるゝ、「非我」のあることを定め、延いて、量、現實性、原因結果實體性等客觀世界現實世界一切範疇が必然的に推究せられる。

カントは諸範疇を経験的に豫定せられたものとして掴み、之を解いて主觀的意識の作用にしたが、「フイヒテは之に反し、對象世界一切範疇を造り出し、之を純粹思惟から導き出し、之を客觀的に存在するものとして、其から彼れの出發した純粹思惟の必然的産物として之を造り出した」のである。而してフイヒテの推究に於て、各個の範疇は其自體と撞着し、相衝突する兩者を結合する綜合が起つて居る。換言すれば、對立に依て發展するヘエゲルの辨證的方法是「既に完全にフイヒテ自身に存する」のである。自我又は純粹思惟はフイヒテに於て、眞の物自體となり、カントの二元論は、「彼の眞に客觀的なるもの、彼岸性、彼の無限なるものと有限なるものとの分裂は、是を以て止揚せられた」のである。而して此から個人の純粹我に對する、若しくは種屬に對する献身、種屬に於ける、且つ種屬に對する生活といふフイヒテの道德原理が生ずるのである。

ラッサアルを以て見れば、フイヒテも其他の大哲學者と共に獨逸國民精神の總括であり、表現である。「カント、フイヒテ、シエリング、ヘエゲルは獨逸精神が其の自己理解に到達し、其存在其自己發展の益々より高さ段階に到達する姿に外ならぬ」のである。

「ラッサアルは轉じて『歴史は自由への人類の發展を示し、且つ實現する』といふフイヒテの歴史概念に言及し、更に進んで、フイヒテに據て、獨逸國民精神の世界史上に於ける意義と使命とを論ずる。

フイヒテに據れば、獨逸國民は常に他の國民と同じく、神の世界計劃の發展上に於ける一必要々素たるには止まらずして、將來の帝國、完成せる自由の帝國が其上に建設せらるべき、概念を獨り擔當する者である。フイヒテは謂ふ。『獨逸國民の統一概念は未だ全然現實のものとなつては居らぬ。其は將來の一般的要請である。併し其は何等の特殊の國民的特色を行はしめずして自由の公民を實現するであらう。』「一の帝國統一の要請、一個の內的に有機的に全然融合せられた國家の要請を現示する爲めに獨逸人は召されて居り、其爲めに永遠の世界計劃中に存在するのである。而して所謂『法の帝國』(Reich des Rechtes)は舊世界に於て見る如く、人間の多數を奴隷とすることなくして、荷も人間の顔を具へた有ゆる者の平等の上に築かれた自由の實現せらるゝ所である。而して『獨り幾千年來此の大目的の爲めに存在し、而して此に向つて徐々に成熟しつゝある獨逸人に依てのみ』此事は行はれる。而して其の第一着手は『意識を以て自ら自己を造る』ことである。

ラッサアルはフイヒテの言を説明敷衍した後、其講演を結んでいふ。フイヒテは言つた。一時代に於て哲學たるものは、次の時代に於ける宗教である。『フイヒテの死後まだ五十年にもなつて居らぬ。而して彼れが當時外界の理解と同情とを得ることなしに、其思索の哲學的孤獨の中に獨り自ら言つた、彼の哲學的なる『意識を以て自己を造る』は、既に宗教となつて、今日通俗にして獨斷的な獨逸統一の名稱の下に、高貴なる獨逸人の胸といふ胸を震動させて居る。有ゆる鐘が鳴つて、此精

神の顯身を、獨逸國家の生誕を告げる日にこそ——其日にこそ吾々はまた眞のフイヒテ祭を、彼れの精神と現實との結合を祝するであらう』

ラッサアルは固よりフイヒテの、カントの二元論を止揚して、純粹思惟を物自體たらしめ、思惟と在有の一致の原理を定めたことを偉なりとするものであるが、併し彼れの此講演に於て最も熱情を以て説くのが國民主義者たるフイヒテであることは、讀者の承認し得る所であらう。然らば、ラッサアルはフイヒテと共に國民主義者であつたと謂つて好いか。此には多少の問題がある。といふのはラッサアル自ら、民族問題に關して其著作中に公言する所は必しも其本志でないといふことを或場合に人に告白してゐるからである。

一八五九年ラッサアルは『伊太利戦争と普魯西の任務』を著して其中でナポレオン三世が南方に於て民族主義に基づいて地圖の修正を行ふならば、好し、吾々も北方に於て同じ事をしよう。ナポレオンが伊太利を獨立せしめるならば、好し、我々はシュレスキク・ホルンシュタインを取らう。兵を丁抹に出せ。『獨逸民族と共に普魯西の死活の利害たる此戦争に於ては獨逸の民主々義者は自ら普魯西の旗旒を擔ひ、之に對する障害は偉大なる一民族の心臓に五十年來鬱積せる民族的感情の爆發が獨り能くする膨脹力を以て悉く之を壓倒するであらう』云々と言つた。然るに彼れがマルクスに與へた私信に由れば、此献策には別に裏面の魂膽があつたといふのである。其に由れば、ラッサアルの第一に目的とする所は、政府を不人望にして革命の爲めに有利の形勢を造り出すことにあつた。彼れは普魯西政府が兵を丁抹に出すことを期待せず、又希望しなかつた。彼れの期する所は、政府がラッ

サアルの献策を容れざることに依て民望を失ふことであつた。彼れが「若し普魯西にして躊躇して何事をも爲さざらんか、是に由て獨逸に於ける君主政治は最早國民的行業に當ること能はざることか、再三證明せられる」といつたのは、政府に對する激勵の辭でなくて、之を非難する爲めの伏線であつたといふのである。

右のフイヒテ讚美にもこれと同じく裏面に別に眞意があつたのであるか？。例へばラッサアルに同情あるマルクス主義者たるベルンシュタインの如きは、民族問題に關するラッサアル、マルクス間の意見の距離を成るべく小ならしめんと欲するものゝ如く、從て彼れの國民主義者としての色彩を薄からしめんとする傾が見える(Wie Fichte und Lassalle national waren. Archiv für Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung V. Jahrg. 144-162. ことに反對なるものは C. Trautwein, Über F. Lassalle und sein Verhältnis zur Fichterschen Sozialphilosophie, 1913)。併し乍ら多少の誇張は別として、上記のフイヒテ論がラッサアルの本志たることを疑ふべき理由は、私は之を認めることを困難とするものである。

## 新經濟史觀の上に於ける萬葉研究

山本勝太郎

- 一、奈良の都に就て
- 二、交換經濟上より見たる市の發達と通貨の變遷
- 三、交通状態一斑
- 四、奈良朝文化の經濟的背景
- 五、貴族階級の享樂生活と奴隸制度

茲に萬葉時代とは、大化改新より奈良朝末期に至る、古代社會の氏族制度廢滅して、新に莊園制度の新社會を建設せる、その過渡一世紀餘の期間を指稱する。

それは、俗に古代文化若くは奈良朝文化時代といはれてゐる所のものである。古事記が出来たのも此の時代である。日本書紀が書かれたのも此の時代である。懷風藻も、萬葉集もさうである。それから古風土記がある。さらに律令がある。歴史は、凡ゆる日本の歴史は、現代から溯つて、遠く茲まで来て止る。それ以前は傳説と神話との物語の時代である。空想と推考とが、その物語をとり巻いていろくいな姿を描く時代である。正史は茲から始つてゐる。——その時代である。

だが萬葉時代の研究は、畢竟大化改新の詔勅と、大寶令の條文と、そして後は奈良朝文化の研究